



# 製材 バンザイ 座談会！

撮影場所：吉野中央木材株式会社 目立て場

最盛期とされる時期と比べると、吉野貯木にある製材所の軒数は減りました。木を取り巻く状況は、なかなかシビアです。そうした現場で働いている後継世代は、「仕事」「吉野貯木」をどのように受け止めているのでしょうか。日々、木と付き合っている5人の男が大真面目に（ときどき脱線）語る「明日の吉野貯木はどっちだ！？」

**ちよブック（以下「ちよ」）**：  
それでは早速。皆さんが家業を継ごうと思ったタイミングはいつでしたか？

**坪岡さん（以下「坪」）**：えっと僕はそういうものと思ってました。

**上大さん（以下「上」）**：葛藤しながら、だんだんとやねえ。

**丸さん（以下「丸」）**：放っとけなくなったのが正直なところ。

**上**：ああ、それは分かる。

**丸**：僕は大学卒業して、すぐ戻ったんですけど。都会に飽きたし。

**一同**：かっこええな、おい！

**丸**：貯木って戻ってこなあかん雰囲気ありますよ。

**阪口さん（以下「阪」）**：戻って来た子は、そう感じてたんかもね。

**石橋さん（以下「石」）**：貯木に帰って来ない子が大半ですよ。後継ぎいる製材所は10軒くらい？

**阪**：いま学生さんで卒業してから戻って来る子を足したら、もうちょっとおるんちゃう。

**石**：吉野貯木史上、今が一番製材所少ないんじゃないですかねえ。新規参入なんて、ほんまないし。

**上**：給料安くて労働過酷とか。でも、自分で采配できて、やりがいも達成感もあるけどな。

**石**：でしょでしょ。なんかこう木の仕事の魅力を発信できてないんじゃないかなあ。

**坪**：僕らが毎日やってる仕事を「かっこいい」と感じてもらうのが大事やなって。子どもが「大人になったら製材の仕事したい」と思って成長して、吉野貯木で働くことを選んでほしい。

**上**：それすごく思う。

**坪**：山から材木を出すことって、ただ木をお金に換算してるだけじゃなくて、社会に貢献してるんやでって伝えたい。第1次産業からの魅力。

**丸**：木は衣食住の住に関わるもので、生活の基本にあるはずなんやけど、なんでこんなに気に留められてへんのか（眉間にしわを寄せるといふ）。木の良さに触れるのが難しいというか、機会がないんか。

**ちよ**：丸さんがスマートフォン



今回、座談会を行った場所は「目立て場（めたてば）」と呼ばれるところです。「目立て」というのは製材に使う刃物の手入れをすること。その作業場が目立て場です。「ここでお酒を飲めば目立てBAR！」（石橋さん談）。

(※1) 本誌44pに掲載しています。(※2) 今夏公開予定の映画『WOOD JOB!』のこと。三重県の山村を舞台にした三浦しをん著の小説『神去（かむさり）ななあ日常』が原作。(※3) 本誌42,43pに掲載しています。(※4) 第1回目は2012年12月、第2回目は2013年11月に開催されました。(※5) 本誌12,13pに掲載しています。



向かう先に製材所のアイコン「ひっこつぽ」



製材工程の説明中です

酒蔵で吉野杉の木桶も見学しました



参加者さんが樽丸づくりに挑戦



2回目の貯木まちあるき  
2013年11月30日（土）の様子

のケース(※1)を作っているのはそのへんにありますか？  
丸：ですね。吉野の木の良さに触れてもらえる機会をなんとかして増やしたいっていう。  
上：そうそう、林業の映画ができればええから、林業や製材に興味持ってくれたら嬉しいなあ。そういうところ、つねくん、よう考えてるよなあ、あの2階(※2)。  
坪：木を売る僕ら自身が、木はいないあって実感できて初めて伝わるものがあるでしょ。それを提示する空間を作りたくて、『あの場所の、あの空気に会いに行く』って、わざわざ訪ねてもらえる場所に。  
ちよ：しかし、人に来てもらうって大変ですよ、実際。  
上：その点で、吉野貯木まちあるき(※3)は、ちょうどいい仕掛けになってると思うよ。どう？  
坪：来てくれた人に町の魅力を伝えるには、自分がそれをどう感じてるか、本当に木が好きなのか？とか。そういうのを自問する機会

にもなってる。  
上：せやな。これまで、そういう時間なかったもんな。  
坪：上大くん、自分の部屋、木を使ってリフォームしてるやん？自分たちの普段の暮らしを見直すことって、めっちゃ大事やと思う。  
上：おお、あれなあ〜！壁にちよっと穴開いて、めちゃくちゃ風入ってくる。死にそうに寒いぞ！  
一同：なんでそのまま！  
上：いや、毎日、木を触りすぎて、わからんようになってきて。  
石：確かに上大くんは誰よりも長い時間、木を触ってるなあ。  
阪：製材所の人間は確かに木をずっと見てるけど、木を使って家のリフォームしたり、案外、実践できてないところあるやん。でも、やってみると木に対する思い入れが絶対変わってくる。自分で使ってみて初めて実感できる、木のええところ、難儀など。  
ちよ：例えば、阪口さんこの展示場(※4)は、木の魅力を分かりやすく伝える場所の一

つですよ。とっておいてアレですが、木の魅力ってなんでしょう？  
石：（ファインディングポーズで）木があればなんでもできる！。家も建つし、燃料にもなる。服とごはんにはならないけど。でも、いろんな事情で使い切れない。  
上：それ難しい質問。考えときます。魅力はさておき（腕組みで天井を見上げ）、木を植え、育て、伐って、使って、また植えてっていう循環の中で仕事ができることへの感謝はあるよね。  
阪：せやな。せやから、その循環を正しいものにして。客観的に見て、経済的なバランス崩れてるやん？。山にお金が帰ってないもん。「やっぱり木はいいね」と言ってもらえること、「安いものがない、安ければいい」という風潮から抜け出すこと、両方しないと。  
上：せやねん、山にお金を戻すのはすごく重要。うちは小さいけど山があって、俺は45歳になったら、今やってる製材の仕事は任せて、

そっち、山の仕事をね、やる。  
坪：ああ、すごくいいと思う。  
ちよ：山から木を出せなくなったら困りますよね。  
阪：（軽く頬杖しながら）山と木のことを知っている、木を使う消費者の声を聞ける立場にいる。林業とエンドユーザーの間、僕ら製材所は、そこを橋渡しできる立ち位置なんやと思う。  
ちよ：この「ちよブック」がまさにそうですね。吉野貯木の観光地化の動きについてはどうですか？。皆さんの本業、考え方が相いれる？  
上：全然ありでしょ。うちは土臭く仕事して製材だけで飯食ってるけど、貯木が観光客で賑わって、なんか買ってくれたら喜ぶ（笑）製材と観光は違うものやから感覚を掴むのに時間がかかるとしても、そういう商売の仕方もあるなって思う人が出てきてええやん。  
石：「おもしろそうなことやってるらしいな」って、貯木に帰って来る人も増えるかもやし。



**石橋輝一**

自称「吉野貯木の巨人」（吉野貯木でも背が高いから）。「7割がた、くだらない思いつきを言う」（坪岡さん談）ともっぱらの評判だが、吉野や木が持つ魅力を掘り起こしてブログ発信を続けるなど、実はとても真面目。

**坪岡常住**

ゆっくり訥々とした話し方で「僕の夢は」と語り出すと周囲は一気に坪岡ワールドにかたわら、「聖山」というものづくりブランドを自ら立ち上げ、吉野材の可能性を伝える取り組みを展開している。

**上大昌幸**

「貯木一柱を売る男＝柱王」（石橋さん談）。「いつ見かけても何かしら木に触っている」と同業者に驚かれるレベル。これから貯木で実現したいことは「ちょぼロックフェス!」。聞き上手で男気ある働き者です。

**丸充彦**

貯木でも特別早起きな人のうちのひとり。今回の5人では最年少だが、「貯木にカジノを作ったら賑わうんちゃうの」と発言。「おっさんか!」と総ツッコミを受けるも全く動じない落ち着き払った人。新婚さん。

**阪口勝行**

物事ひとつひとつを、じっくり考え、答えを探す真摯な兄貴。「吉野貯木に楽しい雑貨店ができてほしい。高松港にある北浜alley（※7）の雰囲気が好きな感じですよ」。吉野貯木早起きチーム一員。薪ストーブが好き。

仕事を終えた19時に座談会を開始。まずは吉野中央木材さんにある「目立て場」で2時間ほど、その後、おいしいおでんの店「うわきや」（貯木まちあるきマップに掲載しています）さんに移動。幼馴染みだからこそその打ち解けた話、同業者としての互いの評価を織り交ぜながら、真夜中0時まで話は続きました（製材所の朝は早いのに!）。林業や製材業が不況とされる時代になってから生業とすることを決めた彼らが語る「いまここ」は、堅実な仕事観と地元への愛情に根ざしています。そして変わらない良さ、新しい価値、それぞれを尊重する「ここから」のこと。吉野貯木に来て、ぜひ彼らと話してみてください。

なるにしろ、人の集まる場になったら嬉しい。  
石：もちろん、まちあるきもやったら良くて。吉野は木と密接に関わってきて、木の値打ちや林業の意義、逆に新しく始めることとか、伝えたいこと山ほどありますからね。とらわれずに進めていこうってことです。やっ樽なるで〜!。桶オケ!

（※6）座談会は2013年12月に行いました。（※7）香川県高松市にある港町の古倉庫を利用した複合施設。



人が集まるところに活気が生まれます。当たり前だけど、多くの場所で、それが難しいことになっています。

坪：観光で来て、気に行って、移住する人もいてもええと思う。吉野って、子ども育てるには安心な場所やと思うもん。みんな顔見知りで。  
丸：さっき、KさんがTさんの妹って聞いたわ。なるほどなあ、そこそこ繋がってるか。貯木狭いなあ。びっくり。  
一同：みつくんが、把握してなさ過ぎなことびっくりや（笑）  
阪：そこは置いて（笑）、確かに暮らしやすいとこやと思うで。だって近鉄通ってるもん。  
上：ローソンもある!  
一同：うおおおっ！（雄叫び）。  
上：なんというか吉野貯木はかなり冷え込んだ商店街みたいなね。そこに目を向けてもらおうと思ったら、出来ることはなんでもやってみたらええよ。  
坪：うん。吉野に限らず、日本の大部分が過疎地なわけやん。吉野町だけが持つ財産に頼るんじやなくて、日本中の過疎地域のモデルになることを考え出せたら。

ちよ：吉野貯木まちあるきはその一例ですね。もうすぐ第3回目開催です（※6）。  
阪：「また来たい」と思ってもらえるまちあるきにしたいよね。今度は友だち誘って吉野に遊びに行こうって、次につながるような。  
上：来てくれた人が楽しんでくれること。貯木の人たちが今後の商売のヒントを見つけてること。  
丸：うちで作ってるアイテムとか珍しい機械とか、ちょっと変わったものあるんで見てもらおうと思ってます。木でいろんなことが出来るんやなっていうのを知ってもらえたらいいですね。  
石：ええこと言うた! そうそう、みつくんとこ、修学旅行生来てたんやっけ。どやった?  
丸：東京のめっちゃ賢い学校の子らで、思ってた以上に熱心に見学してくれた。全員からお礼状が届いてんだけど、感想文が余りにっかりしててビビった。  
一同：まじか……!  
丸：でも、嬉しいね、やっぱり。

坪：うんうん（にこにこ）。えーと、僕の抱負は、自分らしく生きたい、日々の暮らしが素敵なものでありますように。以上です!  
石：え、それ、まちあるきの話? 坪：そうです!  
石：わかりました。えー、では（マイクを握るフリ）、僕的には、貯木まちあるきは今回が最終回です。  
一同：え?（ぼかん）  
石：うん。イベントとしては。その後は「毎日がまちあるきの日」にして行く。いつでも行けるし、誰でも来れるところ。  
坪：ああ。枠組みがあると閉じてしまう可能性もあるもんね。  
ちよ：イベント開催を目的化しないということですか?  
阪：そうやね。あくまで、きっかけとしてであって。  
坪：1年365日、いつ来てくれても大丈夫なとこに。  
上：時代背景は変わる。木が売れない時期は何度もあって、今は僕らが頑張ればいい。それで、吉野貯木が、これまでとは違うかたち

